

農業技術情報

令和6年8月2日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128
 JA幕別町 0155- 54-4118
 JAさつない 56-2131
 JA帯広大正 64-4591
 日甜幕別原料事務所 54-2756
 幕別町農林課 54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：8月1日）（ ）内は平年値

作物名	遅速 日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	—	収穫始 7/17 (7/23) 収穫期 7/18 (7/26) 収穫終 7/22 (7/30)	
春まき小麦 (はるきらり)	—	収穫始 7/31 (8/4) 収穫期 8/2 (8/7) 収穫終 8/ (8/11)	成熟期 7/21 (7/30)
馬鈴しょ	早 1	茎長 67.1 (73.3) cm 茎数 3.2 (3.8) 本/株	終花期 7/19 (7/19)
大 豆	早 8	茎長 59.8 (74.3) cm 葉数 9.5 (9.3) 枚 着莢数 228.8 (0) 個/m ²	
小 豆	早 6	茎長 29.0 (35.4) cm 葉数 9.7 (9.6) 枚 着莢数 70.3 (0) 個/m ²	開花始 7/18 (7/24) 開花期 7/21 (7/27)
菜豆（金時）	早 2	茎長 32.5 (52.9) cm 葉数 3.9 (4.1) 枚 着莢数 67.4 (125.3) 個/m ²	
てん菜（移植）	早 5	草丈 56.8 (66.0) cm 葉数 26.9 (26.3) 枚 根周 32.5 (30.2) cm	
てん菜（直播）	早 6	草丈 61.5 (52.7) cm 葉数 22.8 (19.2) 枚 根周 27.4 (20.9) cm	
牧草（2番草）	早 1	草丈 62.9 (61.8) cm	
飼料用とうもろこし	早 5	草丈 295.4 (272.3) cm 出葉数 18.5 (16.8) 枚	雄穂抽出期 7/23 (7/27) 絹糸抽出期 7/24 (7/29)
たまねぎ	早 5	球径 5.8 (6.3) cm	倒伏始 7/26 (7/29) 倒伏期 7/31 (8/5)

畑 作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
 薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

< 麦 類 >

「きたほなみ」の収穫作業は平年より早く終了しました。「はるきらり」「春よ恋」も収穫が行われています。収穫後のほ場管理を適切に行ないましょう。

1 収穫後のほ場管理（内容は 7/17 付技術情報参照）

- (1) 麦稈の処理
- (2) 多年生雑草対策
- (3) 収穫跡地の後作緑肥作付
- (4) R5年に発生した(通称)「えん麦いもち病」について

<てんさい>

高温に加え降雨もあったため、褐斑病や葉腐病・根腐病の発生しやすい環境となっています。ヨトウガの食害も引き続き見られています。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

防除水量は 120ℓ/10a とします。

1 褐斑病の防除

全地区で発生がみられます。防除間隔を空けないよう計画的に防除しましょう。

表 1 褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
8月8～ 10日	カッパーシン水和剤 又は カスミンボルドー	24 M1	800	7日	5回

2 ヨトウガの防除

ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減しますので、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表 2 害虫防除例

防除 時期	農薬名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
8月8～10日	カスケード乳剤	15	4,000	7日	4回

※カスケード乳剤は、ハダニ・アシグロハモグリバエ・シロオビノメイガにも効果があります。

3 葉腐病(根腐病)の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。連作畑や根腐病発生ほ場では発生のリスクが高まるので注意してください。防除する際は下記を参考に行ってください。

表 3 葉腐病の防除薬剤例

防除 時期	農 薬 名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
8月8 ～10日	モンカットフロアブル 40	7	1,000	7日	5回

<ばれいしょ>

高温が続いた影響で茎葉黄変が早まるほ場が見られています。また、夏疫病や菌核病等もそろそろ発生しますので、できるだけ茎葉を保持するため防除に努めてください。今後、早生品種は茎葉枯凋が進んでいく時期なので、塊茎の肥大状況を確認し茎葉処理の準備をしましょう。

1 疫病の防除

現在発生は多くはありませんが、今後も計画的に収穫までの日数を考慮して薬剤を選択し、防除を実施してください。* 薬剤は 7/17 付技術情報参照

2 軟腐病の防除

軟腐病は強風や機械作業等で傷んだ茎葉の傷口から感染しやすいので薬剤防除を実施しましょう。また、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表 4 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
銅ストマイ水和剤	2 5, M 1	600~800	7 日	5 回
カスミンボルドー	2 4, M 1	500~800	7 日	3 回

※ローテーション防除の実施に努めましょう

※ストレプトマイシンを含む剤の使用回数は合計 5 回まで

※カスガマイシンを含む剤の使用回数は合計 3 回まで

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

まだ収穫まで間がある中晩生種を中心に、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

* 薬剤の使用例は「6月13日付技術情報」を参照

4 茎葉処理

(1) 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期に晴天無風の日を選んで散布してください。

表 5 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量 (mℓ /10a)	水量 (ℓ /10a)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250~450	100	茎葉黄変始~収穫 3 日前まで	2 回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後 2~3 時間以内に降雨が予想される場合には、使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意。

(2) リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下の事に注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。

- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

<豆類>

生育は順調ですが、豆類ごとの生育状況と病害虫の発生状況に注意し、適正防除に努めてください。

1 大豆菌核病の防除

多湿条件で発病は多くなり、開花期前後に降雨が続くと多発します。開花始後 10～15 日目に 1 回目を実施し、2 回目以降は発生条件に応じ 10 日ごとに実施します。＊薬剤は 7/17 付技術情報参照

2 マメシンクイガ・カメムシの防除(大豆)

1 回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始(およそ半分の株に 2～3cm の莢が認められた日)両方が確認されたら、その 6 日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。2 回目防除は1回目の 7～10 日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です(表 6)。

今年は豆類の生育が平年より進んでいるため、現在 2 回目の防除タイミングを迎えています。マメシンクイガ・カメムシ成虫が見られますので同時防除を行いましょう。

表 6 マメシンクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
①	7月下旬	ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回
②	①の10日後	スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回

※甲虫類(コガネムシ等)の食害が目立つ場合は、有機リン剤(スミチオン乳剤)を使用しましょう。

※1 回目または 2 回目にピレスロイド系薬剤(RAC コード: 3A)を散布するのが効果的です。

3 炭そ病の防除(小豆)

ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう。菌核病・灰色かび病の防除時に炭そ病にも効果のある薬剤選択で同時防除が可能です。

表 7 小豆「炭そ病」の防除薬剤例(炭そ病単独で防除する場合)

農薬名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
トップジンM水和剤	1	1,000	14日	4回

※チオファネートメチルを含む他剤との総使用回数に注意。

4 菌核病、灰色かび病の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

表8 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病
1回目	ミギワ10フロアブル	52	1,000	7日	3回	○
2回目	パレード20フロアブル	7	2000~4000	前日	3回	×
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	3回	○

※菜豆類は発生の多い場合に3回目検討(インゲンマメゾウムシ対策の「バイスロイド乳剤」2,000倍と同時散布)

5 アブラムシ類・アスキノメイガ・ハダニ・カメムシの防除(小豆)

現在、アブラムシの寄生が確認されています。今後ハダニ、マキバカスミカメ、アズキノメイガ等の発生にも注意し、寄生を確認したら直ちに防除しましょう。

薬剤の選定にあたっては、発生害虫に効果のある薬剤を選択します。

* 薬剤は 7/17 付技術情報参照

6 インゲンマメゾウムシの防除(金時、手亡)

インゲンマメゾウムシの成虫は、7月下旬以降に出現し8月上旬～9月上旬に発生が見られ、成熟の早い菜豆が被害を受けやすくなります。防除時期は下記を目安にしてください。

- ・金時の防除時期: 莢の色が抜け、白莢が見える時期(8月中旬～)
- ・手亡の防除時期: 子実が大きくなり莢の色が抜け、白莢が見える時期(8月下旬以降)

表9 インゲンマメゾウムシの防除例

防除回数	農薬名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
1回目	バイスロイド乳剤	3A	2,000	7日	3回
2回目	ダントツ水溶剤	4A	2,000	前日	3回

※1週間ごとに2回防除する

※莢全体に薬剤がかかるよう、散布水量は多めとする

<収穫から保管時の注意事項>

① 成熟期以降は早めに収穫する。

② 収穫した豆は速やかに出荷し、必要以上の長期間の保管は避ける。

(は種時に余った種子は、適正に処分する。豆の一時保管場所を清掃し、餌となる豆を一年間残さない。)

野 菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

<ながいも>

過剰な肥料は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になります。

6月1日～7月31日現在における積算降水量は128mm(糠内アメダス)となっており、以下の基準による追肥を実施する降水レベルには至っていません。

ただし、肥料の流亡が心配される場合は、8月上旬に土壌ECの測定を行ってください。

普及センター([TEL:015-572-3128](tel:015-572-3128))やJAまでお問い合わせください。

1 とかち太郎の追肥判断(令和4年度指導参考)

とかち太郎はいもの肥大が収穫まで継続し、多雨条件において尻割れが発生しやすい品種のため、降雨が多い場合は以下の追肥の基準が示されています。



図「とかち太郎」における8月上旬の追肥判断フロー図

※ 土壌熱水抽出性窒素が3～5mg/100mgの場合

※※ トレンチャー耕近側の作土(深さ0～20cm)について、
乾土:水=1:5で抽出した混濁液のEC

※本年は追肥不要の条件となっております。

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

- ★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかりと覆うようにしましょう。散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。